３０病第１８号
平成３０年１０月２４日

関係各位

京都府病害虫防除所長
（公　印　省　略）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第９号（１１月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 ＜平年比（前年比）＞
チャ	カンザワハダニ	山城　やや多 丹波　やや多 丹後　やや多
	チャノホソガ	山城　少 丹波　並 丹後　やや多
野菜	アブラナ科野菜　べと病	並（やや少）
	アブラナ科野菜　白さび病	並（並）
	アブラナ科野菜　白斑病	やや多（やや少）
	キャベツ　菌核病	並（並）
	キャベツ　黒腐病	やや多（やや多）
	アブラナ科野菜　コナガ	やや多（並）
	ネギ　ネギアザミウマ	やや多（やや多）
	ネギ　ネギハモグリバエ	やや多（多）
	野菜類　シロイチモジヨトウ	多（並）

※平年とは過去１０年の平均である。

目次

予報の概要 …… 1
予報本文 …… 2
今後注意すべきその他の病害虫等 …… 8
参考 Ⅰ 近畿地方１か月予報 …… 10
Ⅱ 用語の定義 …… 10
Ⅲ 予報本文の見方 …… 11
Ⅳ 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について …… 12

チャ

1　カンザワハダニ

予報内容　　発生量：山城　平年比やや多い
丹波　平年比やや多い
丹後　平年比やや多い

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量は山城及び丹波で平年並、丹後では発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	0.1	1.1
	寄生虫数(頭／100葉)	0.1	5.4
	発生ほ場率(%)	4.5	13.2
丹波	寄生葉率(%)	0.3	1.3
	寄生虫数(頭／100葉)	0.2	4.5
	発生ほ場率(%)	16.7	23.3
丹後	寄生葉率(%)	0.0	0.4
	寄生虫数(頭／100葉)	0.0	1.0
	発生ほ場率(%)	0.0	12.5

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。

（２）**翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。**越冬前の防除が十分でないと、翌春の一番茶期間近に発生が多くなり、防除に苦慮する場合があるので、越冬前防除の徹底を心掛け、遅くとも１１月末までに終えるようにする。

2　チャノホソガ

予報内容　　発生量：山城　平年比少ない
丹波　平年並
丹後　平年比やや多い

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波で平年並、丹後では平年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	0.6	8.1
	巻葉数(枚／㎡)	0.1	6.3
	発生ほ場率(%)	11.1	44.0
丹波	寄生芽率(%)	0.0	15.0
	巻葉数(枚／㎡)	0.8	2.4
	発生ほ場率(%)	66.7	48.3
丹後	寄生芽率(%)	2.0	9.5
	巻葉数(枚／㎡)	0.0	3.9
	発生ほ場率(%)	100.0	40.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）通常、年５回世代を繰り返し、蛹で越冬する。

（２）特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し越冬密度を下げるようにする。

※今後注意すべきその他の病害虫等はｐ８を参照

野 菜

１　アブラナ科野菜　べと病

予報内容　　発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、キャベツでは発生を認めず（平年並）、カブでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	38.4	35.9

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。

（２）気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。

（３）肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

２　アブラナ科野菜　白さび病

予報内容　　発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、ダイコン、カブともに発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
ダイコン	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	0.0	0.1

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）１０月～１１月の降雨が連続する時期に発生が多い。

（２）窒素肥料の過多を避け、水はけを良くする。

（３）過繁茂にならないよう適切なは種量を心掛け、間引きを徹底する。

３　アブラナ科野菜　白斑病

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量はカブで平年比多い（＋）。

作物	項目	本年	平年値
カ　　ブ	発病株率(%)	42.4	0.4

（２）ダイコン、ハクサイで発生を認めている。
（３）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
（２）強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
（３）肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
（４）多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

４　キャベツ　菌核病

予報内容　　発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）本年５月の発生量は、平年比多い（＋）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	2.4	0.7
発生ほ場率(%)	40.0	3.3

（２）１０月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.0

（３）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）発病適温は２０℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
（２）発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で２～３年間生存する。
（３）発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

５　キャベツ　黒腐病

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量は平年比多い（＋）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	27.0	0.2

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長する。
（２）降雨日数と発生量との相関が高い。
（３）台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努め

る。

6　アブラナ科野菜　コナガ

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比多く（＋）、ダイコン、カブではともに平年比やや多い（＋）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.4	0.1
	寄生株率（％）	4.0	1.0
ダイコン	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.1	0.1
	寄生株率（％）	0.6	0.5
カブ	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.1	0.01
	寄生株率（％）	0.8	0.1

（２）１０月第３半旬現在、予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺市では誘殺を認めず（平年並）、亀岡市、京丹後市ではともに平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.1
亀岡市	誘殺数(頭)	1	1.5
京丹後市	誘殺数(頭)	2	4.3

※ 誘殺数(頭)は9月第4半旬～10月第3半旬の合計値

（３）１０月第２半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で誘殺を認めず、亀岡市で平年比やや多く（＋）、京丹後市で平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0.0	－
亀岡市	誘殺数(頭)	14.3	8.0
京丹後市	誘殺数(頭)	4.6	5.3

※ 誘殺数(頭)は9月第4半旬～10月第3半旬の合計値

（４）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
（２）雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
（３）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
（４）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

7　ネギ　ネギアザミウマ

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
被害株率（％）	33.6	20.0
被害度	8.4	5.5

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

（２）**本種は府内各地で発生が問題となっているネギえそ条斑病を媒介**する。

（３）ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV)による病害で、本病の防除には**ネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的**である。

（４）被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

（５）本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。

（６）**新系統（産雄性生殖系統）と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域（山城及び南丹地域）では注意する**。

＊ 詳細は平成２９年３月２７日付け「防除所ニュース平成２９年第３、４号」
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news3go_iysv_negiazamiuma.pdf
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news4go_negiazamiumakeitou_hoka.pdf**を参照のこと。**

８　ネギ　ネギハモグリバエ

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）１０月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
被害株率（％）	49.6	65.4
被害度	12.4	17.8

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

（２）産卵から羽化までの発育所要日数は２０℃で約３６日、２５℃で約２３日程度である。

（３）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

９　野菜類　シロイチモジヨトウ

予報内容　　発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

（１）９月中旬現在、ネギの小株で発生を認めず、大株で発生を認めている。

株の種類	項目	本年	平年値
小株	幼虫数(頭/株)	0.00	0.01
	寄生株率(%)	0.0	1.4
	発生ほ場率(%)	0.0	5.8
大株	幼虫数(頭/株)	0.01	―
	寄生株率(%)	0.8	―
	被害株率(%)	2.4	―
	発生ほ場率(%)	40.0	―

※ 小株：葉長概ね40cm未満、大株：概ね40cm以上

（２）９月第２半旬現在、京田辺市のフェロモントラップへの誘殺数は平均を大きく上回っている（＋）。

場所	項目	本年	平均値
京田辺市	誘殺数(頭)	75.9	16.2
亀岡市	誘殺数(頭)	71.7	―
京丹後市	誘殺数(頭)	194	―

※ 誘殺数(頭)は9月第4半旬～10月第3半旬の合計値

（３）ダイコン、キャベツで発生を認めている（＋）。

（４）向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量は平年並または多く、日照時間は少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。

（２）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

＊ 詳細は平成３０年８月３０日付け「病害虫発生予察注意報第４号」、平成３０年８月１日付け「病害虫発生予察注意報第３号」、平成平成２９年７月３１日付け「病害虫発生予察注意報第２号」、平成２９年９月２１ 日付け「病害虫発生予察注意報第３号」

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h30tyuiho4.pdf
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h30tyuiho3.pdf
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h29tyuiho_2goyotoumushirui.pdf
http://cms.pref.kyoto.jp/cms8341/byogai/documents/h29chui4_shiroichi.pdf
を参照のこと。

※今後注意すべきその他の病害虫等はｐ８を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

チャ

1　炭そ病

１０月中旬現在、丹波地域及び丹後地域で多発傾向を認めている。

発病葉は落葉しやすい。一番茶の土台となる成葉の落葉が多いと、一番茶の収量・品質に影響を及ぼす。また、越冬した発病葉は翌年の伝染源となる。

秋整枝は通常どおり行う。銅水和剤などを散布し、翌年の発病を抑制する。

2　チャトゲコナジラミ

１０月中旬現在、府内全域で発生を確認している。

本種の農薬による防除は、冬期（１～２月）のマシン油乳剤の２回散布が有効である。ただし、赤焼病の発病を助長する。そのため、マシン油乳剤を散布する３日から７日前に銅水和剤を事前に散布すると、これを予防できる。

野菜

1　軟腐病（キャベツ、ハクサイ、ダイコン、カブなど）

向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されているが、**台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長されるとともに**、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕からも細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

2　ネギべと病

本年は、４月下旬から梅雨明け時まで多発した。平均気温が１５～２０℃で降雨が多くなると、**ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。**

3　トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（Tomato yellow leaf curl virus:TYLCV）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

（１）黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。

（２）先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

4　タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプＪｐＬ等）、バイオタイプＢ、バイオタイプＱが確認されている。

バイオタイプＱは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の３点を防除対

策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

・施設内にコナジラミを「入れない」。
（１）開口部の防虫ネット被覆。
（２）黄色粘着ロールの展張。
（３）近紫外線カットフィルムの使用。

・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
（１）発生初期の防除の徹底。
（２）薬剤のローテーション防除の実施。
（３）天敵や微生物農薬の有効利用。

・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
（１）開口部の防虫ネット被覆。

参　考

Ⅰ　近畿地方１か月予報
（１０月２０日から１１月１９日までの天候見通し）

平成３０年１０月１８日
大阪管区気象台発表

＜予想される向こう１か月の天候＞

向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう１か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに４０％です。日照時間は、平年並または多い確率ともに４０％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率５０％です。２週目は、平年並の確率５０％です。

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　温	３０	３０	４０
降水量	４０	４０	２０
日照時間	２０	４０	４０

病害虫防除所では上記の天候の１か月予報の表現を**「向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多いと予想されている」**としました。

Ⅱ　用語の定義

１　半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

２　発生量－－－病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

３　平年値－－－原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

４　平年値との比較

１）時期

平年並	平年値を中心として前後２日以内
やや早い	平年値より３～５日早い
やや遅い	平年値より３～５日遅い
早い	平年値より６日以上早い
遅い	平年値より６日以上遅い

２）量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で10年間に４回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に２回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に２回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に１回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に１回程度しか発生しない量

Ⅲ　予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1　チャノコカクモンハマキ

予報内容　　発生量：山城　平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波　平年並（前年並）
丹後　例年並（前年並）

・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
・平年比の見方は、「Ⅱ　用語の定義、４　平年値との比較」を参照してください。
・（　）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

（１）前年１０月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。

（２）４月中旬現在、山城で平年比多く（＋）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	４月の調査結果	４月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

・「予報の根拠」とした直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

（３）４月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。

（２）通常、第１回目のふ化期は５月末～６月始めで、４回世代を繰り返す。

（３）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
・文中の（－）、（＋）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（－）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（＋）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

Ⅳ　短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようにしましょう。

(ご注意)

本内容は、国（農林水産省等）や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1　最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 （変更年月日）	主な商品名	変更内容※
アセフェート （平成26年11月17日）	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ （平成27年7月8日）	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2　今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおり使用していただければ問題ありません。

有効成分 （変更年月日）	主な商品名	変更内容※
ジメトエート （平成27年2月4日）	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート （平成27年2月18日）	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル （平成27年2月18日）	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 （変更年月日）	主な商品名	変更内容※
NAC （平成27年2月18日）	ミクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン （平成27年10月14日）	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン （平成27年11月25日）	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン （平成28年10月19日）	サンマイトフロアブル、サンマイト水和剤	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
イプロジオン （平成28年4月20日）	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム （平成28年4月27日）	コニファー水和剤	適用作物削除
チオジカルブ （平成28年11月2日）	ラービンフロアブル、ラービン水和剤75	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
クロルフェナピル （平成28年11月30日）	コテツフロアブル	適用作物削除 使用時期変更
トルフェンピラド （平成29年10月25日）	ハチハチ乳剤、ハチハチフロアブル、 アクセルキングフロアブル	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。（要登録）また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いします。

○参　考

厚生労働省（急性参照用量（ARfD））を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について）

http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf　（外部リンク）

http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf　（外部リンク）

農林水産省農薬コーナー（農薬に関する施策関係）

http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/　（外部リンク）

独立行政法人農林水産消費安全技術センター（農薬登録情報の検索）

http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html　（外部リンク）

農薬工業会（使用制限にかかわる登録変更）

http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1　（外部リンク）

詳しくは、**京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト**（**http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html**）をご参照願います。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。
ホームページアドレス　http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター　電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	０７５－３１５－２９０６
・山城北	農業改良普及センター	０７７４－６２－８６８６
・山城南	農業改良普及センター	０７７４－７２－０２３７
・南丹	農業改良普及センター	０７７１－６２－０６６５
・中丹東	農業改良普及センター	０７７３－４２－２２５５
・中丹西	農業改良普及センター	０７７３－２２－４９０１
・丹後	農業改良普及センター	０７７２－６２－４３０８

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/

京都府病害虫防除所

〒621－0806京都府亀岡市余部町和久成９
TEL　0771-23-9512
FAX　0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－